

ジャズと私

江別医師会
たぐち内科クリニック

田口 浩之

母がクラシック音楽好きだったこともあり、幼少時から音楽は身近な存在だった。しかし子供の頃はクラシックにあまり馴染めず、演奏会で聴かされても退屈極まりなかった。中学に入ってロックに興味を持ったことがあったが、兄が持っていたオスカー・ピーターソンのアルバムを聴いて、そのピアノの素晴らしい響きと卓越したテクニックに圧倒された。それを契機にジャズ全般にのめりこんでいったと思う。ピアノも好きだったが、特に1950年代のハードバップ時代の管楽器やリズムセクションに夢中になった。中学2年ごろからは学校のテスト期間が終わった帰り、真っ先に玉光堂に寄り、お目当てのレコードを数枚購入、帰宅後部屋を暗くして聴き入るのが最大の楽しみとする〈根暗〉な学生だった。

ジャズに関する本もよく読んだ。今は廃刊となったスイングジャーナルを毎月のように目を通した。私の稚拙な語彙力の半分は、この雑誌から得られたのではないかと思う。

ジャズはまた自分の人生観もやや変えたかもしれない。例えばジョン・コルトレーンの批評に記載された〈無秩序の秩序〉なる考え方は、それまで正確さと緻密さを追求しがちだった神経質な自分の考え方に大きな影響を与えた。

当時は同級生にジャズを趣味とする者は皆無だったが、それが（今考えると愚かだが）自尊心を高めるような気がしていた。演奏もしたくなり、マイルス・デイビスの影響を受けてトランペットを吹いたり、高校に入ってからドラムを叩いたりしたが、ほとんどものにならなかった。浪人～大学時代はあまり音楽に関わることなく過ごし、社会人になってからも多忙？のため、しばらく聴くことはなかった（聴く部屋もなかった）。

開業して夜間に病院からのコールが無くなったこと、またその後念願の一戸建てに住んで聴くスペースができたことから、ここ数年久しぶりにゆっくりとジャズをはじめ、音楽を聴く環境に恵まれている。聴く媒体は主にCDだが、例えばギル・エバンスの〈時の歩廊〉はバックのパーカッションがひどく聴こえにくく、音のレンジが狭い。昔のレコードを引っ張り出して聴いたら素晴らしかった。昨今のレコード回帰現象も判る気がする。何はともあれ音楽鑑賞を堪能しているが、前日聴いた音のフレーズが翌日になっても一日中頭から離れず、診療中も鳴っていることがあるので、やや困惑する今日この頃である。

スタジオ9の日々

札幌市医師会
勤医協中央病院

田村 修

私（昭和63年、旭川医大卒）は、本学始まって以来の「最低の出席数」と「最大の卒試追試数」という二冠に輝きながら、幸いにして無事卒業、そして国家試験にも合格でき、今こうして生業に励むことができいております。出席日数が少ない理由？ 当時の私は、旭川西武B館9階にあった多目的ホール「スタジオ9」のバイトスタッフとして働いていたのです。

子どものころから音楽好きで、田舎で独りさみしくギターをかき鳴らしていた私は、1982年の大学入学と同時に、早速あこがれの軽音楽系サークルに所属。同期の仲間とアマチュアコピーバンドを結成しました。時を同じくして旭川西武が隣接するams館とともに大規模リニューアルされ、そこにスタジオ9が開設されました。翌年スタジオ主催のライブ企画に参加した時、スタッフの人に声を掛けられたのがきっかけで入り浸るようになったのですが、後で当人に聞いたところ「一番ご飯食べていなさそうだったのが可哀想で、面倒見てやろうと思った」そうです。ほどなく受付やセッティングを手伝うようになり、「じゃあ社員証作れば」ということになって、いつの間にか社員搬入口からスタジオ入りするようになりました。スタジオ9は音楽だけでなく演劇や映像企画などの多目的スペースだったので、企画運営に始まりPAや照明機材のセッティングや使い方、16mmフィルム映写機の使い方から、市内各所へのポスターパンフの配送、エレベーターのドアに段ボールを挟んでおけば閉まらない裏技まで手ほどきを受け、また異業種の人脈もたくさん得ることができました。この時に「いろんな人の生き方」に触れたことが今の仕事の役に立っている、とは言い過ぎでしょうか。給与は時給換算できちんと頂いておりましたが、お金の大半は音楽機材購入費用に消えていきました。

スタジオ9は1992年9月の館内リニューアルの際に閉鎖され、献血ルームに衣替えとなりました。スタジオ閉鎖直前のライブ企画に呼んでいただいたことが最後の思い出です。旭川西武も2016年9月30日19:30に全館閉店。A館はすでに解体工事が進められ、B館跡地がホテルになるとの話もありますが、今は閉鎖された建物が寂しくそびえているままです。今でも旭川駅前に降り立つと自然と視線が上を向き、B館9階のあたりを眺めてしまいます。